

旅行 — ゲオルク・フォルスターの 一形成要素 (Ⅱ)

中 村 皓 光

1

「タヒチ人たちの生活様式を例外なく支配しているものは、一種の幸福な単調さである。日の出と共に彼らは起床し、体を洗って気分をさっぱりさせようと、すぐさま小川や泉へ向って急ぐ。それから彼らは働いたり、散歩したりするが、それも日中の暑気が彼らに自分の小屋の中か樹蔭で休息せよと強いるまでのことである。この休息時間に彼らは髪の手入れを丹念に行う。手入れと言っても、自分の頭髪をとかして滑らかにしたうえで、香油を塗り込むだけなのだが。時には笛を吹き鳴らし、その調べに合わせて歌ったり、草の中に横たわって小鳥の歌を楽しんだりもする。正午か正午少し過ぎが彼らの食事の時刻であり、食事が済むと彼らは再び家事や娯楽に取り掛かる。どんなことをする際にも互いの間には好意が取り交される。それと同時に若者たちが入乱れて恋し合いつつ、また恋人たちに愛情の深さを示しつつ成人していく様が見られる。底意のない陽気な冗談、素朴な物語、楽しいダンス、そして質素な夕食が夜の帳を下す。それから小川で二度目の水浴をして、一日が終る。これらの住民たちはこの単純な生活様式に満足し、幸福な風土のもとでどんな苦しみも憂いも知らぬ。他の事にはいっさい無知であっても、幸福だと言われるべきであろう。⁽¹⁾」

『世界一周航海』の執筆に当って、22才のゲオルク・フォルスターは客観的な記述と学問的な考察を一貫させようと努めているので、タヒチ島原住民の日常生活を描いたこの文章の牧歌的な内容は例外的なものになっている。しかし、彼の執筆態度の根本には南太平洋の原住民とその素朴な文化に寄せる好意が常に潜んでいること、彼の観察眼が冷酷な分類学者のそれではなく、感性と善意の眼差であることは、記述の端ばしから容易に見てとれる。そして彼が失敗するのも、むしろこの点に於てのことである。例えば、当時ヨーロッパ人の好奇心を南太平洋に向わせた最大の理由の一つである女性の《性的放埒》に関して彼は、ヨーロッパ的倫理の立場から一般論的弁護を行うあまり、観察を誤っている。「当地のみだらな女たちが最も卑賤ない

(1) Georg Forsters Werke, Bd. 3, S. 89.

し最も下層の階級の者であることを、私は既に別の機会に述べておいたが、今やこのことは更に実証された。（中略）私の判断によれば、このことは娼婦がこの土地に於ても一つの特別な階級を形成していることを明白に証明する。とは言え、われわれの先人たちが或はほのめかしているほどに、この階級が多人数から成っているわけではなく、また風紀の乱れが一般的であるわけでもない⁽²⁾。」フォルスターの意図するところは、この引用文の最後で明らかになっている。大多数のタヒチ女性はあばずれではない、と彼は言いたいのであるが、皮肉なことにこの結論は彼の立場から見れば誤りであり、現代の民俗学から見れば正当なのである。もちろんここで問題になるのは、《みだらさ》と言う概念の有無だけではなく、その地方的相違である。

なんぴとも、18世紀のヨーロッパに《みだらさ》が存在しなかったなどとは思えないであろう。ジャコモ・カザノヴァはある意味で18世紀人の一典型である。ドン・ファン伝説が好んで各国の舞台に掛けられたのもこの世紀のことであり、そのうちの最高傑作『ドン・ジョヴァンニ』の作曲者は、最初の恋人である2才年下の従妹に猥雑できわどい恋文を数通書き送ったことがある。イギリスの一退職官吏が『ファニー・ヒル』を書き、ロンドンで出版したのは1749年のことである。ただし、こうした現象はすべて広義の《ひめごと》に属するものであった。キリスト教徒に与えられている戒律は、それを意識するとせぬとに拘らず、従う者にも破る者にも依然としてその權威を保ち続けていた。人間の官能的行動に関して、当時の社会が後代に比べると事実寛大であったにしても、性的なものはやはり原罪に深く結び付けられて、ともすれば《罪》そのものとみなされた。それは罪であるがゆえに《ひめごと》となり、かえって誘惑的な甘美さを帯びていた。当時の人々は多かれ少なかれ罪悪感を代償として、或はそれにも快楽を覚えつつ、官能的なものを経験したに違いない。フォルスターもまたこうした状況を免れてはいない。南太平洋の原住民は文字通り公然と性的行動をとる、即ち、悪が白昼蔓延し、その正統権を主張するという事実が、彼のヨーロッパ的=キリスト教的道德意識に強烈な衝撃を与えたことには疑いの余地がない。だからこそ彼は罪と誘惑の具体化としての《娼婦階級》の存在とその成員の少なさを無意識的に強調して、その他の原住民たちの名誉を救済しようと試みたのである。

事実、フォルスターの観察したところは誤っている。南太平洋諸島に存在した《最も卑賤ないし最も下層の階級》はそれ自体王族階級と同じほどにごく少数の成員しか持たず、そもそも階級構成に決定的な要素となるほどのものではなかつた⁽³⁾。彼が娼婦と称している女たちは、実は総人口の大部分を占める中層階級の少女たちであり、彼女らには未婚である限り性的自由——歴史的に制限されたことのない自由——が存在した。彼女らが示す性的行動は飲食と同じくらい当然な生の一部であったが、それはまた年齢に伴って嚴重に制限され、結婚と同時に禁

(2) Ditto, Bd. 3, S. 45~46.

(3) Ditto, Bd. 4, S. 334 (Anm. zu 300₁₇).

じられるものでもあった。売春ないしそれに類似の現象は稀に、また偶発的にしか忖じなかった。要するに、原住民少女の大部分が性的自由を行使したと言う事実は、決して持続的乱婚などの否定的な評価を受けるべきものではなかった。⁽⁴⁾ だからこそ彼女らは、フォルスターの意味では《みだら》であり、現代民俗学から見れば純潔だと言えるのである。

以上批判を加えた部分は、フォルスターの記述のなかでも曲解と言える箇所であって、これだけで彼を評価することはもちろん許されない。先に述べたように、彼が原住民とその生活を観察する場合には常に愛情と好意の視線が注がれているのだから、われわれもまたその方向に従って進むのがよかろう。原住民が異邦人に対して示す純朴な厚遇は既にウォーリス、ブーガンヴィユ、クックら当時の航海者がヨーロッパに紹介したところであるが、フォルスター自身もまた随所でそのことを体験している。「息子の友人たちを自分の家に迎えてもてなすことができるのを、この二人がどんなに心から満足に思っているかは、ありありと見て取れた。(中略)この尊ぶべき老夫婦が給仕してくれるのを傍らにして、私たちは自分が人間であることを詩的な仕方で忘れ去り、神々となってピレモンとバウキスにかしづかれているのだとの思いに到ることもできたであろう。」⁽⁶⁾ このような原住民の善意の記述は『世界一周航海』に多く出現するが、注目すべきことに、フォルスターが好意をこめて描く人々は常に庶民層に属しているのである(20年後ジャコバン主義に熱狂するフォルスターの姿がここに早くも予想される、と言ったら速断に過ぎるであろうか?)。例えばフォルスター父子が一原住民にビーズ玉と釘を与えると、彼は直ちに美しい細工を施した真珠貝製の釣針を返礼として提供する。この貴重な資料に対してもう一度釘が渡される時、もはや手許になにも持たぬ彼は子供を使に出して果実と蕨を取って来させる。「オ=ウェハウのこうした行為それ自体はなにか高貴なところを持っており、また物物交換や利己的な価値判断についての普通概念をはるかに超えていると感じられたので、私たちは彼に対してまことに高い尊敬の念を抱いたのである。」⁽⁷⁾

ここで交換された物品の相対的価値を考えても意味のないことであろう。ガラスも金属も知らぬ原住民にとってのビーズ玉と釘は、イギリスの博物学者にとっての貝殻製釣針と同様に貴重なものだからである。第二の交換に於ては、《貴重品》が全くの日常食にすぎない野生の果実でもって返礼される。フォルスターの敬意は、人を使い時間をかけても返礼を果さずにはいない原住民の態度に対して、《利己的価値判断》に左右されることなく払われているのである。その限りにおいてわれわれもまたフォルスターに同感し、原住民オ=ウェハウを尊敬することができる。しかしフォルスターはその考察をさらに飛躍させて、自身の感性と道德観とに一致するこの種の《善》を、人間精神の最も奥深いところに時空を超えて潜む根源的要素に数

(4) Ditto, Bd. 4, S. 327 (Anm. zu 226₁₀).

(5) Vgl. Moorehead, Part I: Tahiti.

(6) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 251.

(7) Ditto, Bd. 2, S. 264~265.

えようと、いささか性急に試みている。⁽⁸⁾ 息子を戦死させた一老婆が旧知のクック船長に再会した時、「彼女は自分が失った者のことをこの機会にまざまざと想起し、私たちを少なからず感動させたことに、大声をあげて泣き始めた。かくも情のこもった感じやすさは、人間の心の本来の優しさを明らかに証拠づけると共に、私たちの心を捕えて常にその感じやすい心の持主の利益になるように配慮させるものなのである。」⁽⁹⁾ タヒチ島には《涙の挨拶》という風習があって、人々は悲しを感じる時ばかりか、なにほどこかの儀礼的行動を必要とする場合にも号泣しつつ挨拶を交わすのだ、⁽¹⁰⁾ という事実までは、フォルスターにも発見できなかったのである。

しかし、彼にこのような解釈を行わせる原因は、単に彼個人の感性和善意にあるばかりではない。本論の冒頭に引用したような牧歌的生活は、タヒチ島の状況に関してやはり一面の真実を伝えるものである。時折部族間に戦争が起っても、それは決して長期間続くものではなく、全般として見ればタヒチ島の日常は平和以外のなにものでもなかった。タヒチ島の原住民たちは、既にこの時までにウォーリス、ブーガンヴィユ、クック（第1次航海）らの探險隊によって損害を蒙った経験があるにも拘らず、白人の外来者に対して相変らず友好的であった。このことは、圧制的な父親に仕えながら幼時以来ロシアやイギリスで苦勞を重ねて来たドイツ人フォルスターにとって、新しい体験であったに違いない。そこで、「彼らの善良で汚れを知らぬ心根には、復讐欲など事実登場する余地がない」⁽¹¹⁾ という新鮮で悦ばしい判断が、一挙にフォルスターの愛と善意を原住民たちに向わせ、結果として彼の結論を急がせたのである。「だが、人間には人間愛が固有のものだということ、不信や悪意や復讐欲などの野蛮な概念は道義が少しづつ頹廢していった結果に過ぎないということは、多感な心情の持主にとって真に慰めとなる考えである。」⁽¹²⁾ このフォルスターの言葉が、結局すべてを表現している。それは、不完全な観察と性急な考察から生じた浅薄な結論などというものではない。彼の憧憬するところがタヒチ島民の生活によって彼自身のために実証され、彼の生の根本的態度として確定されたものである。⁽¹³⁾

2

ここで浮んで来る疑問は、フォルスターの感性和彼の観察した原住民の素朴な生活様式が常に幸福な一致をみたのだろうか、ということである。タヒチ島は一般のヨーロッパ人にとってと同じく、フォルスターにとってもやはり現世の樂園であり、快樂の島であり続けたのか？ 答は予想されるように《然り、そして否》である。フォルスターは原住民の行動のうち

(8) Vgl. Uhlig, S. 25~28.

(9) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 277.

(10) Ditto, Bd. 4, S. 334 (Anm. zu 296).

(11) Vgl. Moorehead, S. 18, 22~23.

(12) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 267.

(13) Ditto, Bd. 2, S. 267.

に《愛》や《善》とならんで、彼の感性と道義心に抵触するものがあるのを発見している。ここでもわれわれにとっての問題は、いったん《悪》の存在が観察されたなら、それはどのような態度で記述され、考察を加えられるか、ということである。

南太平洋の島々に寄港する18世紀の航海者を驚かせたことの一つに、原住民たちの盗癖がある。クックの第1次航海の乗船インデヴァー号がタヒチ島に到着した翌日、原住民たちは早くも大挙して表敬訪問に向ったのだが、これには船の品物を手当り次第に持ち去るという付録も付いたのである。事情は船上に於ても陸地に於ても異ならなかった。水兵の持つ銃が盗まれようとしたり、テントの中に置いたはずの四分儀が無くなったりもした（この種の事件の意味については、ムーアヘッドが要領よく記している⁽¹⁴⁾。島民がヨーロッパ人の持物をこっそり持ち出さずにはいられなかったのは、ヨーロッパ人が私有財産不可侵の原則を放棄できないのと同じことで、この根底には個人の能力とプライドに関する心理の動きが潜むのである。フォルスターも同様の意見を述べている。「しかし、彼女が盗んだ品物にことのほかの愛着を感じたのは、もしかすると、ひとえに彼女自身の巧妙さのおかげでそれが手に入ったのだ、と信じていたからかも知れない。」⁽¹⁵⁾）。

原住民の盗癖は、たとえフォルスターの既得の知識の中にあつたにしても、やはり愉快なことではあり得なかった。インデヴァー号に起ったことは、そのままレゾリュション号にも繰返されたのである。物物交換にやって来た原住民たちの一部が、既に相手の所有に帰したはずの椰子の実をひそかに海中に投げ込むと、仲間がそれを拾い集めてもう一度取引にやって来るという、すこぶる悪質な行為までも実見された⁽¹⁶⁾。この連中が鞭をくらった上で追い帰されたのは、フォルスターにとっても当然の処置だった。しかし、ある時ナイフとスプーンを食堂から盗んで海へ投げた一原住民に向って、クック自身が銃撃を加え、部下と共にボートに乗り込んで追跡し、原住民たちの投石に遭って逃げ帰った後、四ポンド砲を陸地めがけて発射するという事件があつた。群衆は四散し、水兵たちは二隻のカヌーを戦利品として捕獲した⁽¹⁷⁾。私の見るところでは、フォルスターが原住民の盗癖を弁明的に考察し始めたのはこの出来事以後のことである。ささやかな窃盗行為と、これに対して探險隊長たるクック自身が加えた冷酷な処置との対比が強力な動因となって、フォルスターを弱者の側へ接近させてゆく。なるほど彼は後になつても、この盗人のことを「実際、はなはだしい忘恩の徒であつた」と呼びはする。盗みが行われたのは食事が与えられた時のことだったからである。「しかし彼の生命に、彼を誘惑した品物以上の価値があることには、疑いの余地がなかった。」⁽¹⁸⁾ 物物交換も娘たちの訪問も停止

(14) Vgl. Moorehead, S. 20~22.

(15) Georg Forsters Werke, Bd. 3, S. 78.

(16) Ditto, Bd. 2, S. 225.

(17) Ditto, Bd. 2, S. 232~233.

(18) Georg Forster, *Reply to Mr. Wales's Remarks* (Georg Forsters Werke, Bd. 4, S. 29).

されたのを見て、事件の後遺作用を怖れたクックが原住民のカヌーを返還した後、フォルスターは皮肉をこめて書きつけている。「私たちの公正さを示すこの試みは、われわれが望んだほどの速かな効果を挙げはしなかった。」⁽¹⁹⁾《復讐心を知らぬ》原住民たちの姿が再び海岸に現れたのは、それから数日後のことになった。

一方フォルスターは、白人が原住民に信頼を寄せる時には原住民も必ず信頼を返し、その盜癖をみづから抑制すること⁽²⁰⁾、原住民の家には扉も門もないこと⁽²¹⁾、土地の物産は彼らの欲望を決して刺激しないことを、自身で体験することができ、白人侵入者として次のように反省の言葉を洩らしている。「してみると、私たちが彼らのこうした悪徳に最初のきっかけを与えたのであり、また抵抗できないほど誘惑的な魅力のある品物を彼らに紹介したのであるから、その限りに於て彼らの悪徳は私たち自身の責任なのである。」⁽²²⁾（この反省が時としてやや卑怯な、抑圧された形——沈黙をもって表現されることもある。1773年9月13日の父親の日記とフォルスター自身がそこに署名入りで追加した記述から、この日彼と一原住民の間に交された口論が攪み合いにまで発展し、携帯していた銃を奪われそうになった挙句、父親が原住民めがけて発砲し、軽傷を負わせるという事件が発生したと分るが、『世界一周航海』はこの出来事について一言も触れていない。おそらくフォルスターは、原住民の頽廢と悪意の誕生についての自分の考察が、あまりにも露骨な、一方の生命を危くするような仕方を実証されたので、当事者である自分の責任と罪の重みを直視するに耐えられなくなったのである。彼の沈黙に、彼ら父子と海軍省の間の良好とは言えない関係——この発砲が原因でクックと父フォルスターの間に激しい議論が交された——をめぐる政治的配慮を見て取ることができるとしても、それは『世界一周航海』執筆当時の状況から見て、二次的な問題であろう。）自分自身もまた異質な文明の産物を無批判に導入している以上、主観的善意の如何に拘らず、原住民を素朴から頽廢へ、善から悪へおもむかせる契機を提供しているのだと認識することによって、フォルスターは彼の愛する原住民の悪癖を弁明すると同時に、彼が原住民たちの好意に満ちた振舞のなかに発見したと信じ得た理念、《人間精神の根底を形成するものは普遍の愛と善であり、野蛮なものは頽廢の副産物でしかない》という彼の基本的理念をも救済しようと試みたのである。

他方、フォルスターの社会観察が一般原住民から離れて支配者層に向うと、そこにまぎれない《頽廢》が既に根を張っていることが発見される。その最初の例は一肥大漢のすさまじい食事ぶりである。「私たちは一軒のきれいな家の所にやって来たが、その中には一人のひどく

(19) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 234.

(20) Ditto, Bd. 2, S. 224f., 291.

(21) Ditto, Bd. 2, S. 283.

(22) Ibid.

(23) Ibid.

(24) Georg Forster, *Eintragung G. Forsters in J. R. Forsters Journal* (Georg Forsters Werke, Bd. 4, S. 109~111).

肥満した男が手足を伸ばして横たわり、世にもだらしのない姿勢で頭を木製の枕にもたせかけて、のらくらと時を過していた。(中略) そのうちに一人の女性が彼の傍に腰を下して、大きな焼魚の肉とパンの实の果肉を掌に山盛りにしては、その都度彼の口に詰め込んでやったのだが、彼はそれをひどく貪婪な食欲でもって呑み下したのである。⁽²⁵⁾ こうした食事の仕方はわれわれにも吐気を催させる。だが、当時のタヒチ島原住民にとって肥満は王族の特権、身分証明、美の理想であり、肥満体を持続するためには規則正しい食餌療法——無為と大食——が半ば義務的に行われねばならなかったというのが実情である。⁽²⁶⁾ フォルスターはこの意義を知らぬままに終ったが、たとえ彼がそれを承知していたとしても、やはり同様の反感を抱いたことであろう。なぜなら、前述したように人間の本性は善であると信じるフォルスターにとって、怠惰と貪食の罪をむき出しに現すこの光景は、それが自分たち文明人に比べて頹廢にも悪にも遠いはずの原住民によって示されたものであり、また自分たちの侵入と影響とは無関係に成立していたものであるだけに、なおさら理解できない不愉快なものだったからである。彼は失望と憤激をこめて記す。「この時まで私たちは、一国民の全体がある程度の文明を達成しながら、しかも同時にどんな身分の者もまずまず同じ食物、同じ楽しみ、同じ労働と休息を共有するほどつましやかなある種の平等を相互に維持し得てきた場所を、とうとうこの地球の片隅に発見したのだ、という快い思いに浸っていたのだった。だが、あのなまくらな道楽者を一目見たとたん、この美しい空想はなんと速かに消え失せたことだろう。あの男が、人間社会にとってまったく無益な、ぜいたくきわまる無為にふけりつつ、自分の生命をすりへらしていた有様ときたら、勤勉な庶民が額に汗して働きながらなお飢えねばならないというのに、国から油気たっぷりの旨い汁を吸って肥え太っている文明諸国の特権付きの居候どもにそっくりだった。⁽²⁷⁾」

これは、12歳にして既にポーランド、ロシア、イギリスの随所で支配者の権勢と下層民の困窮とをつぶさに見聞し、その後自身でも辛酸をなめ続けてきた一人の若者が初めて挙げた社会批判の声である。その激烈な調子は、後年フランス革命とジャコバン主義に熱狂するあまりライン河西岸地帯の独立を、さらにフランスへの合併を図った夢想的革命家の声を早くも響かせている。当然小タヒチ島の酋長オ＝アヘアトゥアとその一族も、フォルスターの辛辣な攻撃を免れてはいない。酋長のまじめくさった表情とぎくしゃくした身ぶりは、「時代遅れの政治家たちの間でなら、もしかすると値打のあるものに数えられるかもしれないが、要するに、私たちがタヒチ島についてほとんど予想もしていなかった虚偽と瞞着の仮装以外のなにものでもなかった。⁽²⁸⁾」探険隊に長期の滞在をすすめるながら、しかも約束したはずの生鮮食料品——とりわけ、船の中で飼うための豚——は一向に提供しようとしぬ酋長一族の不可解な態度にフォル

(25) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 248~249.

(26) Ditto, Bd. 4, S. 329 (Anm. zu 248₃₆).

(27) Ditto, Bd. 2, S. 249.

(28) Ditto, Bd. 2, S. 256.

スターが見て取ったことは、《中層民》の善意と援助とはおよそ無縁の支配者的思考法が、この《南海の樂園》にも既に存在すること、他人の信頼と希望をつなぎとめておくためには見せかけの礼儀や陰険な策略すら駆使されていることであった。ここでフォルスターは、「いかに小タヒチ島が高度に洗練された国家とはみなされ得ないにしても」⁽²⁹⁾という、意味深長な認容文を挿入している。こうすることによって彼は、《高度に洗練された》ヨーロッパ諸国の宮廷政治が文明の進歩を謳歌し享受しながら、かえって頹廢を進行させ悪を産んでいることを婉曲に指摘し、読者にヨーロッパ文明の批判を促すのである。

3

フォルスターがクック探險隊の一員であったことは、彼の人間観察のためにも大きな利益をもたらした。なぜなら、他の隊員と行動を共にしなければならない制限がかえって、南太平洋原住民と西欧文明人の接触をその場で体験する機会を常に与え、両者の比較を容易にさせたからである。そして、彼の注意が前者を離れて後者に向う時も、彼の批判精神はたいていの場合ためらうことなく、隊員や植民地商人の粗野で時には残酷な仕打を曝露する。⁽³⁰⁾ ニュー・ジーランドで起った掠奪事件について報じた後、フォルスターはヨーロッパ人航海者の質の悪さを嘆いて言う、「こうした旅行の途中では同じような事態が多かれ少なかれ発生してきた。とりわけインデヴァー号の乗組員は、この点について毛一筋ほどもましではなかった。タヒチ島で彼らはトゥボライ・タマイデ酋長の妻を誘拐し、ニュー・ジーランドではまったく公然と、原住民の所有品はことごとく合法的に自分たちに帰属するのだと主張した。(中略) そして上官は、水夫たちが以前から見せてきた、交友的な原住民をほんの些細な動機から殺害してしまう性癖の非人道性に、例外なく不平を訴えているのだ。」⁽³¹⁾ アフリカ大陸の南端にも活動の場を持っていたオランダ・東インド会社が、広大な植民地を經營するために多勢の奴隸を酷使する一方、《補充兵》と呼ばれる兵士労働者をヨーロッパに於て暴力的な手段でかき集めたことは周知の事実であるが、その悪辣なやり口についてもフォルスターは観察と指摘を怠っていない。会社が所有する数百人の奴隸たちは一軒の宿舎に詰め込まれて暮さねばならず、ヨーロッパから一回に600ないし800人ほど送られて来る《補充兵》のうち、80人から100人は船がケープタウンに到着するまでに死亡し、200人から300人の者が重病にかかっているが、彼らを収容するための病院は一つしかなく、いかなる特効薬も準備されていない。⁽³²⁾ 要するに「ヨーロッパ⁽³³⁾

(29) Ditto, Bd. 2, S. 257.

(30) Ditto, Bd. 2, S. 186, 239, 284.

(31) Georg Forsters Werke, Bd. 3, S. 357~358.

(32) 中には虐待——『壊れ甕』に於けるアーダムの脅迫とエーフェの恐怖を想起されたい——に耐え兼ねて脱走する者もあった。レゾリューション号が一人のドイツ人脱走兵を帰途に乗組ませたことをフォルスターは報告している (Georg Forsters Werke, Bd. 3, S. 420)。

(33) Ditto, Bd. 2, S. 77~78.

のオランダ人たちにとってあれほど大いに役立ってきた寛容の精神は、彼らの植民地に於ては見られるべくもない⁽³⁴⁾というフォルスターの簡潔な感想が、「この残忍で野心的な薬味商人たち⁽³⁵⁾」の正体を言い当てている。

ところが皮肉なことに、フォルスターはあらゆる《非人道的行為》のなかで最も衝撃的なものの一つをニュー・ジーランドで体験しながら、その顛末を冷静に記述しようと努力するあまり、批判の直截性を失ってしまう。衝撃的だというのは、それが原住民による食人だからであり、批判の無力化が惜しまれるのは、イギリス海軍のれっきとした士官がこの食人をなんの躊躇もなく見世物的に再演させる点にこそ、真の非人道性が存在するからである。事件のあらまは次のようなものである。

1773年11月23日、インディアン入江に上陸した数名の士官が、波打際に積み上げられた人間の内臓を発見する。驚愕する彼らの前に原住民が姿を現して、人体各部の残骸を示し、他は食べてしまったと伝える。それは前日の争いで倒された敵の一人だった。「ピカーズギル氏は、頭部を買って旅の記念にイギリスへ持ち帰ろうと望んだ。そこで彼は釘を一本提供し、この値段ですぐさまそれを手に入れた。」⁽³⁶⁾ 帰船した士官たちが人頭を見世物にしているうちに、原住民がレゾリュション号を訪れて、ピカーズギルの獲物に食欲を示す。「ピカーズギル氏は人頭をまるまる手離す気にはならなかったが、頬の肉を一切れ分けてやろうと申し出て、⁽³⁷⁾ 実際それを切り取り、彼らに差し出した。」ひとびとの注視を浴びながら肉片は焙られ、食いつくされる。「その後間もなく船長とその一行が帰船して来たが、彼らもまた、これほど異常な出来事ならじっくり見物したいものだという気になったので、ニュー・ジーランド人たちはこの実験をもう一度全乗組員の眼前で繰り返した。」⁽³⁸⁾

なんと無慚な事件であろう。原住民の姿も疎ましいには違いないが、それにもまして、血みどろの人頭を《旅の記念》に求め、乞われるがままにその肉を料理する士官の行為は、なんと胸の悪くなるものだろう。そして、好奇心のために《実験》を反復させるクック船長は、なんと無気味な人物であろう！ たとえピカーズギルがその《料理人》でなく、クックはひたすら民俗学的知識を求めていたにせよ、また数名の船員が嘔吐し、他の数名が原住民の処刑を叫んだにせよ、その種の事実ないし記録⁽³⁹⁾は決して彼らの名誉を回復するものではない。なぜなら、記録に従う限り彼らの拒否反応はことごとく原住民とその行動に向けられるばかりで、ピカーズギルの買物に始まる一連の死体冒瀆はなんら問題にされないのである。人種差別の問題を言わなくとも、これは大きな背理である。もし彼らの倫理観念が、未開の原住民による食人

(34) Ditto, Bd. 2, S. 76.

(35) Ditto, Bd. 3, S. 419.

(36) Ditto, Bd. 2, S. 403.

(37) Ibid.

(38) Ibid.

(39) Vgl. Beaglehole, S. 293.

に対して嘔吐や激怒といった一見正常な反応を起こさせるものならば、なぜそれは《文明人》による死体冒瀆に対して沈黙するのか？ 《食う》ことに反撥する者が、《食わせる》ことなら平然とできるとは、フォルスターの指摘してきた文明の頽廢でなくてなんであろう？ 他ならぬこの側面をこそ、彼はここで深く省察し鋭く批判すべきであったろう。しかも、この時のレゾリューション号には一人のソシエテ諸島人が乗り組んでいて、やはり一部始終を目撃すると共に、イギリス人とはまったく異なる態度をみせたのだから、フォルスターには老いた文明と若い文明の人間の相違を比較観察する好機が確かに与えられていたはずである。

なるほど、甲板上の血なまぐさい事件の記述は優れている。文体は簡潔であり、リズムは明瞭である。無駄な形容は一切見られない。しかし、そこに生じる緊迫感はあるのよい法廷速記録のそれに似て、書記者自身の感覚を伝えるものはなにもない。われわれがこの記述を通じて知り得るのは、フォルスターがなにごとに見落さなかったということだけである。彼の眼差が恐怖に満ちていたのか、無表情だったのか、それとも嬉々としていたのかは、憶測することも困難である。

なるほど、ここには乗組員の示したいくつかの態度が否定的な調子で挙げられてはいる。例えば、「ある者はほとんど一緒にかぶりついたような様子⁽⁴⁰⁾をみせた」が、「これに反し、他の者は食人族たちに対して、非常識にもまるで一民族の生殺与奪の権利を握っているかのような腹立ちぶり⁽⁴¹⁾で」彼らを全員銃殺したがった、とフォルスターは記している。しかし、ここでフォルスターは乗組員の憤激をせっかく《非常識》と呼んでおきながら、なぜかその所以を論じようとはしない。それゆえ、どの比喻も結局は平凡な判断の羅列にとどまり、彼の氣息を読者に伝達する力に欠けている。

一方フォルスターは、「ソシエテ諸島出身の若者マハイネだけが、この出来事に際して他の誰にもまさる真の感じやすさを示した⁽⁴²⁾」と報じる。「その住民が既に野蛮を振り捨て、社会的結合に踏み込んでいる土地に生れ、育まれた⁽⁴³⁾」マハイネにとって、この食人実験はさながら地獄であった。彼がその場を逃げ去って船室に閉じ籠り、長時間号泣し続けていたことは、フォルスターのみならずクック船長と天文学者ウェイルズによっても記録されている（クックの記録は期せずしてマハイネの公正な判断を伝えることになった。この少年は人肉を切り取った士官とニュー・ジーランド原住民との双方を《卑しい男》と呼んだのである⁽⁴⁴⁾）。フォルスターはマハイネに感嘆の言葉を捧げる、「私たちが問い質した結果、彼は哀れな犠牲者の不幸な両親のことを思って泣いているのだと分った！ 彼の考え方のこうした転回は彼の心性に名誉を授けるものであった。なぜなら、彼はこまやかな限りの愛を要する社会的諸義務に対して活発

(40) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 404.

(41) Ibid.

(42) Ibid.

(43) Ibid.

(44) Vgl. Beaglehole, S. 293, 818.

な感覚を胸に秘めているに違いないこと、彼の同胞に対して極度の善意を抱いているに違いないことが見て取られたからである。⁽⁴⁵⁾」

確かにマハイネの姿と言葉には、人を感動させるところがあっただろう。しかし、この若者についてのみ社会学的=心理学的解釈を加え、しかも明らかに好意をもって論じることは、そのまま読者の足下に躓きの石を置くことになる。なぜなら、未開を離れて社会的結合に入った段階の人間が既にこれほど立派な人間性を示す時、比較にならぬ進歩を遂げたイギリスの文明と社会がなぜその国民にあれほどの暴挙をなさしめ得るのかと読者は疑い、この点についてフォルスターがなんの考察も加えなかったことを想起せざるを得ないからである。実際、彼に論理的困難はなかったはずである。先にタヒチ島で獲得した《文明の頹廃と悪の誕生》の基本的理念を、たとえばマハイネとピカーズギルの両名に適用すれば、少なくとも論述上の不均衡は避けられたであろう。いったい、こうした欠陥はなぜ生じたのか？

論証に用いるべき資料が存在しないので、以下は仮説の段階にとどまるものであるが、手短かに言えば、それは感性と理性を複雑に妥協させた結果であろうと私は考える。フォルスターの感性は、この事件に於てニュー・ジーランド原住民（マオリ族）とイギリス人との行為に反撥する一方、後者の一面的=感情的反応に共感したのであり、理性はこれに反して前者の行為の弁明を欲しながら、後者の行為と反応との否定を求めたのではあるまいか。先ずマオリ族の食人について言えば、そもそも食人行為自体が冷静な省察を加えるにはあまりに刺激的で非日常的な事柄である上に、フォルスターにはマオリ族に対する若干の先入主が食人事件の直前に成立していただろうと推測できる。（彼はこの日の朝、父と他一名の乗組員の実見談として、マオリ族社会に於ける男性の強大な権力の一端を聞き知っている。即ち、6,7才の男児が母に食物を要求し、拒まれると大きな石を彼女に投げつけた。彼女がこれを咎めようとする、父までが母を打ちのめし、地面に投げ倒したというのである。フォルスターはこれを男性による甚だしい虐待として感情的に記している。⁽⁴⁶⁾彼は一般に未開社会に見られる女性労働を、その普遍的特徴である《強者による弱者の支配》だと理解してはいるが、「とは言え、ニュー・ジーランドではこの暴虐が他のどこよりも極度に押し進められているように思われる。この土地に於ては、男性たる者はその母をあらゆる道徳原理に反して侮らねばならないと、幼年時代からしたたかに叩き込まれるのだ。」⁽⁴⁷⁾と記録せずにはいられない。ここで彼の言う《あらゆる道徳原理》がマオリ族のそれではなく、文明社会のそれであることは自明である。この言葉の非論理的な混入こそ、そのままフォルスターの感性の昂りを示すであろう。）それゆえフォルスターはマオリ族の食人行為に感性的=瞬間的に反撥したのであろうし、イギリス人が見せた嫌悪には同様の理由から共感したのであろう。——もちろん理性がそれを是認するかどうかは別問題で

(45) Georg Forsters Werke, Bd. 2, S. 404.

(46) Ditto, Bd. 2, S. 402.

(47) Ibid.

ある。なぜなら「地上のあらゆる国民が、私の善意を平等に要求している」⁽⁴⁸⁾からである。ところでイギリス人による死体冒瀆についてはどう考えられるか？ これも尋常の感性にとって醜悪極まることであり、この場合は文明人がその道德原理に反する行為をなしたのであるから、フォルスターの理性にとっても悪以外のなにものでもない。

では、フォルスターの記述はなぜあれほど抑制された、中立的な文体を採ることになったのか？ 今感性の促すがままに事件を描こうとすれば、マオリ族の行動とイギリス人の行為の二つに対してその非を鳴らし、しかもイギリス人の拒否反応には是認の声を挙げねばならず、理性に従って論述すれば、マオリ族の行動を弁明しながらイギリス人の行為と反応の二点を批判しなければならぬ。いずれにしてもフォルスターにとっては矛盾であり、同時にイギリス人が非難されねばならなくなる。ここで『世界一周航海』が元来英語でイギリス人のために書かれ、イギリスで出版されたものであることを考えれば、中立的な状況記述が最上の解決策であることはもはや明白であろう。

こうして理性と感性をいわば政治的に妥協させた結果、食人事件の記述は救いを欠くものになった。マハイネを賞讃する文章も、たぶん幾分でも明るさを添えようとする試みであろうし、もしかするとこの事件の最も恐るべきところ——おそらくクック船長を初めとするイギリス人たちの行為——を言外に強調しようとする試みであるかもしれないが、成功しているとは思えない。フォルスターもまた妥協の後に残る内心の分裂感から、なんとかして恢復しなければならぬ。行を改めることもせず、食人についてのさまざまな省察をそれまでの記述に続けて書くのは、そのための努力であろう。それはまたマオリ族の風習を言外に弁明することにもなる。

テ ク ス ト

- Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe.* Hrsg. v. d. Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, durch Gerhard Steiner, Berlin seit 1958.
 Bd. 2: *Reise um die Welt, 1. Teil* (1965).
 Bd. 3: *Reise um die Welt, 2. Teil* (1966).
 Bd. 4: *Streitschriften und Fragmente zur Weltreise. Erläuterungen und Register zu Band 1-4* (1972).

参 考 文 献

- Beaglehole, J. C. (ed.), *The Journals of Captain James Cook on His Voyages of Discovery.* Vol. II: *The Voyage of The Resolution and Adventure 1772-1775*, Cambridge 1969.
 Moorehead, Alan, *The Fatal Impact. An Account of the Invasion of the South Pacific 1767-1840*, London 1966.
 Uhlig, Ludwig, *Georg Forster. Einheit und Mannigfaltigkeit in seiner geistigen Welt*, Tübingen 1965.

(48) Ditto, Bd. 2, S. 12.